

令和5年度（令和4年度修了生）フォローアップの結果から

佐古 清

京都教育大学大学院連合教職実践研究科

1. フォローアップの概要

本フォローアップは、当該年度に公立学校に新規に採用された修了生について、勤務校への訪問調査を実施するもので、平成24年度（平成23年度修了生）から評価FD活動の一環として継続実施してきた取組である。修了生の就職後のフォローアップを行うとともに、連合教職大学院での学びの成果と課題について把握し、連合教職大学院における就職支援体制の充実並びにカリキュラムの改善充実等に生かすことを目的としている。

令和5年度は、京都府・京都市の新規採用教員11名、大阪府、滋賀県、兵庫県の新規採用教員4名及び京都府・京都市の常勤講師採用教員8名の計23名の修了生について、令和5年9月から令和6年1月までの期間に実施した。次年度（令和5年度修了生）からは新カリキュラムの下で学修した修了生になることから、当該学年が旧カリキュラムで学修した最後の修了生となる。

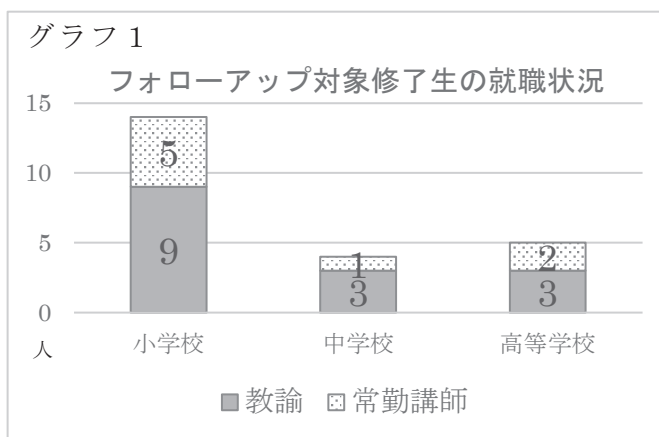
令和4年度の学部卒修了生は40名で、その内27名が専任採用となり、専任採用率は67.5%（前年度67%）であった。フォローアップ対象の23名に限った専任採用率は65%

で、修了生全体の専任採用率とほぼ差がない。対象者の校種別の就職状況は、右のグラフ1のとおりである。中学校については7名が他府県で採用されており、京都府・市での採用者数が少ないのが本年度の特徴といえる。近年は、京都府・京都市の採用試験に通らなかった受験者が、他府県で合格するケースが増えている。

訪問調査の内容は、①事前に依頼した「管理職アンケート」、②訪問時に校長から聞き取った「管理職ヒヤリング」、③修了生から聞き取った「修了生ヒヤリング」、④訪問した教員が感想を記した「訪問者シート」からなる。

2. 管理職アンケートの結果から

今回のフォローアップでも、表1にある12項目について、勤務校の管理職に3段階で評価を依頼した。評価は、A「優れている」、B「概ね良好」、C「課題あり」で回答してもらい、それぞれ3点、2点、1点で集計を行った。その結果を直近4年間で比較したものが表1である。

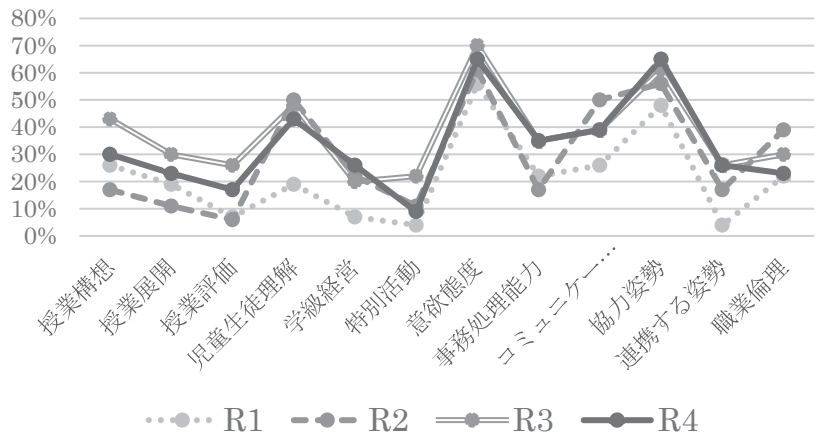


各観点の平均値をとると、令和元年度 2.13、2 年度 2.25、3 年度 2.35 と令和元年以降徐々に上昇していたが、令和 4 年度修了生は 2.29 と前年度を若干下回る結果になった。

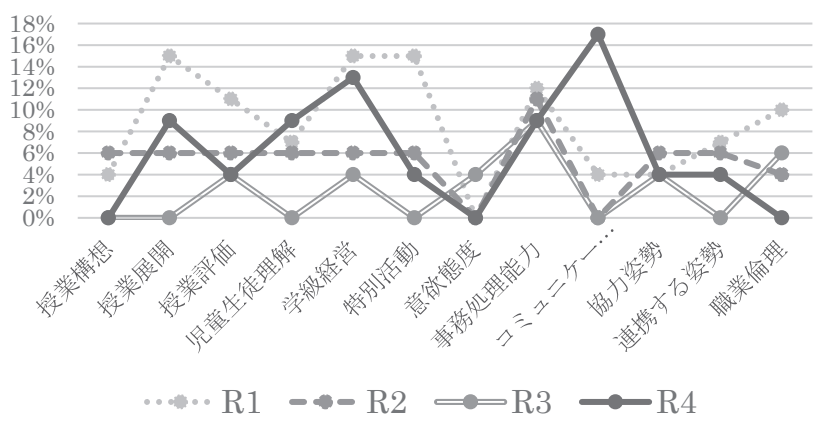
表 1	授業力			生徒指導力			職務遂行力			協力 姿勢・協 働性	連携 する 姿勢・力	職業 倫理	平均
	授業 構想	授業 展開	授業 評価	児童 生徒 理解	学級 経営	特別 活動	意欲 態度	事務 処理 能力	コミュ ニケー ション 力				
R元	2.22	2.00	1.96	2.11	1.93	1.89	2.56	2.11	2.22	2.44	1.92	2.15	2.13
R 2	2.11	2.06	2.00	2.44	2.17	2.06	2.67	2.06	2.50	2.50	2.11	2.33	2.25
R 3	2.43	2.30	2.22	2.48	2.15	2.22	2.65	2.26	2.39	2.57	2.27	2.26	2.35
R 4	2.32	2.14	2.14	2.41	2.14	2.05	2.68	2.23	2.23	2.64	2.23	2.27	2.29

管理職からの評価の各観点について、A「優れている」とC「課題あり」の割合の変化を示したものが、それぞれグラフ 2 と 3 である。グラフ 2 では、いずれの年度でも「意欲態度」と「協力姿勢・協働性」の評価が高く、「児童生徒理解」についても直近 3 年間は比較的高い傾向にある。グラフ 2 の「授業力」に関わる 3 観点については、令和 3 年度に改善傾向が見られたが、今年度は少し下がった。グラフ 3 からは、C「課題あり」の割合が全般的に昨年度より増加していることがわかる。特に「コミュニケーション力」に課題が見てとれる。同様に「児童生徒理解」「学級経営」についても「課題あり」の割合が増加している。

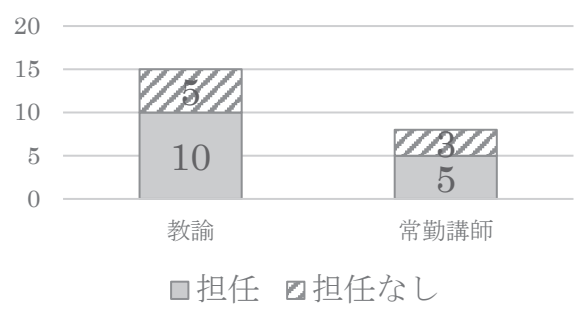
グラフ 2 管理職評価 A「優れている」評価の割合



グラフ 3 管理職評価 C「課題あり」評価の割合



グラフ 4 担任を持つ割合



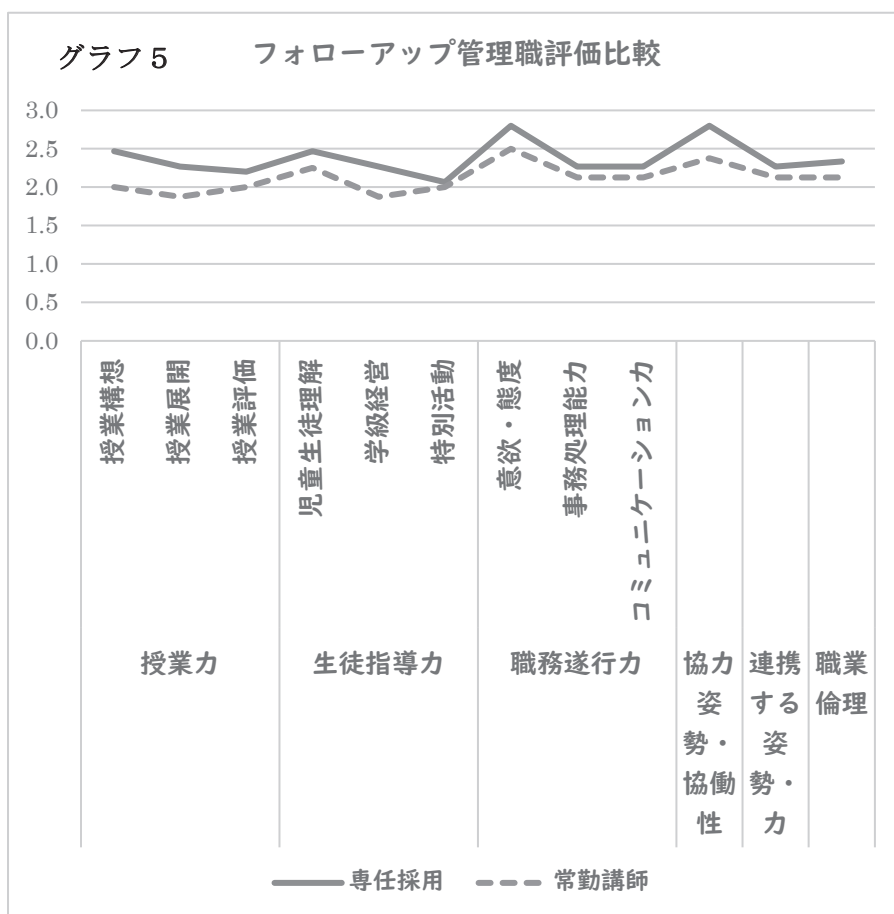
担任「あり、なし」の状況は、グラフ 4 のとおりである。専任採用（教諭）15 名の中で、学級担任をしている者が 10 名（67%）、担任を持たない者（副担任等）が 5 名（33%）であった。また、常勤講師 8 名の中で担任は 5 名（63%）である。

担任を持つ 15 名は全員が小学校勤務で、教諭

はもとより常勤講師であっても皆担任を持っていた。一方、中学・高校で採用された場合は、1年目から担任を持つことがほぼないようである。今回の修了生ヒヤリングでは、仕事の大変さや悩みについて、担任を持つ修了生の方が相当に深刻であった。小学校で採用された場合、とりわけ初年度に大きな試練があると推察される。多くの場合、担任する学級には支援を必要とする児童が少なからず在籍しており、その対応はもとより、担任として多様な保護者の対応を迫られることになる。周囲からのフォローがあるとしても、そこでの大変さは想像に難くないだろう。

次に、専任採用と常勤講師とで管理職の評価に差があるかどうかを確認したい。前に示した表1の管理職評価について、専任採用と常勤講師とに分けて示したものがグラフ5である。差が比較的顕著に見られるのは、「授業構想」「授業展開」「学級経営」「意欲・態度」「協力姿勢・協働性」についてである。いずれも学習指導、生徒指導、教職員の連携に関わっており、教職の核となる領域であり、教員採用試験における模擬授業、面接、集団討論等で試される力でもある。

これとは別に、管理職には可能な限りで口頭による5段階評価をお願いした。結果を集計すると、専任採用の評定平均が3.80(昨年度3.90)であるのに対して、常勤講師の平均は3.25(昨年度3.38)で、0.55の差が見られた。この差は、観点別に評価したグラフ5とも整合しており、有意な差だといえよう。当該の5段階評価については、その学校の状況や校種等の環境に影響されることや、管理職からの主観的な評価であるということを念頭に置く必要がある。これまで勤務校の管理職の理解を得て紙面による「管理職アンケート」と口頭での5段階評価を実施してきたが、このような形で修了生の評価を管理職に依頼することについて、今後は検討が必要であろう。



3. 管理職ヒヤリングから

(1) 服務全般の印象

修了生の服務全般の印象を管理職に尋ねると、「意欲的に頑張っている」「服務態度は真面目で、授業準備にも余念なく取り組んでいる」など、肯定的な声がほとんどであった。「とてもしっかりとしており、折り目正しく、教員としての振る舞いができている」「教員としての資質を感じる」等、態度面や教員としての資質について評価する声が大半を占めた。先述の5段階評価でも、フォローアップを行った23名のうち評価5が3名、評価4が9名で、計12名(52%)が好評価を得ており、評価3の10名を合わせると96%になる。

高い評価を得た修了生に共通するのは、コミュニケーション能力が高く、職場での人間関係が良好なことである。受け身ではなく積極性があり、他の教員と協働して取り組んでいることがわかる。初任者なので上手いかないことがあるのは当然のことであって、好評価の修了生には、日頃から報連相をしっかりと行っていて声を掛けやすい(壁をつくらない)という特徴が見られた。中には、職員室でムードメーカーの役割を担い管理職からも信頼を得ている者もいて、初任者であっても身近なところからリーダーシップを発揮する様子が報告されている。

(2) 優れている点について

管理職から「優れている点」として挙げられた意見を集計すると、おおよそ次のとおりである。

〈優れている点〉	(単位：意見の数)
・ 人間性、丁寧な対応、人当たり、物腰	・・・ 6
・ 積極性、よく気がつく	・・・ 6
・ 教材研究、研究的な姿勢や向上心	・・・ 4
・ コミュニケーション力、報連相	・・・ 4
・ 周囲に聞く姿勢、謙虚さ	・・・ 4
・ チームで連携する力、フットワーク	・・・ 3
・ 児童生徒理解、寄り添う姿勢など	・・・ 2
・ 授業力、教科の専門性	・・・ 2
・ まじめに取り組む姿勢、前向きさ	・・・ 2
・ 安心して任せられるところ	・・・ 2
・ 粘り強さ、芯の強さ	・・・ 2
・ 見通し、計画性	・・・ 2
・ ICT 機器の活用、扱い	・・・ 1
・ 情報処理	・・・ 1
・ 仕事の処理、こなす力	・・・ 1

今回の管理職ヒヤリングでは、「人間性、丁寧な対応、人当たり、物腰」や「積極性、よく気がつく」など人柄に関して評価するコメントが多く聞かれた。教育は人であると言われるように、これはこれで非常に大事なことはあるが、教職大学院の学びの成果という点では些か物足りなさが残る。昨年度は、「児童生徒理解、寄り添う姿勢など」が「9」と最も多く、次に「教材研究、研究的

な姿勢や向上心」が「8」と続いた。ところが今年度は、前者が「2」、後者が「4」と極端に少なくなっている。選択肢によるアンケートではないので一概に比較することはできないが、教職の専門性に関係する評価コメントが減ったのは気に掛かるところである。

(3) 劣っている点について

管理職から「劣っている点」として挙げられた意見を集計すると、おおよそ次のようになる。

〈劣っている点〉	(単位：意見の数)
・子どもとの関係づくり（一歩引いた指導）	・・・5
・進んでコミュニケーションをとる姿勢	・・・3
・チームや組織で動くことの理解	・・・3
・学級経営の力・自信	・・・2
・子どもをよく見た授業の組み立て	・・・2
・事務処理能力	・・・2
・授業力、授業スキル	・・・1
・子どもの見方	・・・1
・特性のある子どもへの対応	・・・1
・早めに見切る（あきらめる）傾向	・・・1
・自分の思い込みで判断する傾向	・・・1
・特にない	・・・3

課題として比較的多く挙げたのは、「子どもとの関係づくり」である。「子どもの見方が課題」という指摘もあることから、原因の一つに児童生徒理解の不十分さがあるように推察される。そこに自信の無さが加わり、結果として「一歩引いた指導」「教師として強い指導ができない」「叱り方がわからない」「子どもと対等になってしまう」ことに繋がっているのではないだろうか。また、児童生徒理解は人間理解であり、人間理解の深浅はそのまま「同僚との関係づくり」や「保護者対応」に繋がっていく。児童生徒理解を深めるための学びや経験を増やすとともに、少なくとも「進んでコミュニケーションを取りに行くようなことが少ない」等の見られ方を同僚からされない積極的なマインドセットが必要であろう。大学院での専門実習には、「研修教員」として子どもや教職員との関係づくりを実践する機会が豊富にあるはずである。そのまたとない機会を院生自身が自覚して積極的にチャレンジすることを期待したい。新カリキュラムには、1年間を通して毎週水曜日に連携協力校に赴く「水曜実習」と、その翌日（木曜日）に大学で行うの「省察」¹とがセットで組み込まれている。そこで重要になるのは、実習の体験や学びを深く省察し（省察し合い）、課題を整理して次週の実習に繋げる、あるいは探究を継続することである。そのためには省察の在り方についても、さらに研究を進める必要があるだろう。

また、「事務処理能力がもう少しあれば」という指摘は看過できない。初任者の多くは、授業や児童生徒の対応の他に、慣れない事務処理に追われて息つく暇もない1年間を過ごすことになる。事務処理能力の重要性は修了生からも挙がっており、「優先順位を付けて仕事を進められる力」を付けるプラクティスも必要であろう。

(4) 教職大学院でもっとつけておくべきだと思われることは？

管理職からは、「ボランティアとは違って、仕事として今の業務をこなせるようなスキルを学んできてほしい」という声が聞かれた。具体的には、「子ども集団をマネジメントする力」や「今現場でよく起こる具体的な事象への対応の仕方」などである。修了生の中には、実習でお世話になった連携協力校にそのまま採用されるケースがあり、当該の管理職からは、「即戦力として頼りにしている」という声をしばしば聞く。その一方で、「(実習で) 学校に来て、学校をサポートいただいていることについてはとてもありがたく、『ありがとう』という声かけになってしまう。その人が実際に採用されて教職に就くと、とたんに困ったことになることもある。先生という仕事は、こんな難しさがあるとか、しんどさがあることも伝えたり経験したりできるとよい」との指摘があった。さらに、複数の管理職から聞かれた意見として、「先生としての軸となるものを作る。授業・生指とかの以前の部分、自分はこう教師として取り組むというところが大切。授業・生指は後でつくっていい」との声である。よく吟味したい意見である。

また、専門実習の充実に生かしたい意見として、「責任を経験すること。一日担任として子どもに関わる経験をさせられないか」という提案があった。「やることが多い現場において、時間をコーディネートできるようになってほしい」という期待も込められている。専門実習における「一日担任」は、連携協力校の理解と協力を必要とするが、ぜひ取り入れたいプログラムである。特に小学校の教員を目指す院生には、「一日担任」の経験が必須であると考えられる。

4. 修了院生ヒヤリングから

(1) 赴任以来特に苦勞していることは何か

修了生が学校現場に出て特に苦勞していることは、おおよそ次のとおりである。

〈赴任以来特に苦勞していること〉	(単位：意見の数)
・ 生徒指導に関わること	・・・ 6
・ 保護者対応	・・・ 4
・ 学級経営	・・・ 4
・ 授業、低学力層への手立て	・・・ 4
・ 特性のある子どもへの対応	・・・ 3
・ 不登校傾向の子どもへの対応	・・・ 3
・ 同僚、教員間の関係	・・・ 2
・ 事務作業等の多さ、忙しさ	・・・ 2
・ 部活動に関わること	・・・ 2
・ 構想する力の不足	・・・ 1
・ 前任の先生と比較されるところ	・・・ 1
・ 教員としての当たり前がわからない	・・・ 1
・ 特にない	・・・ 4

修了生が苦勞していることとして多く挙げたのは、「生徒指導に関わること」である。子どもが「問題行動を起こしたときの対応」や「いじめが起こったときの対応」など、学級内で起

この問題への対応に苦勞することが多いようだ。「きまりを守らせること」や「注意した生徒との関係が回復しないこと」などに悩む修了生もいた。問題を起こす子どもは特性のある場合が少なくなく、そうした「特性のある子どもへの対応」や「不登校傾向の子どもへの対応」にも苦戦していることを改めて確認できた。ある修了生は、「何か一つトラブルが起きると周りが見えなくなる。同時多発的に起きることに対応する力がない」と自らを客観視し語っていた。学校現場では、このような問題事象が相互に関連して起こることも多く、担任であれば「学級経営」の問題に直結し、問題がこじれると保護者の難しい対応を迫られることになる。言うまでもなく現場で問題に突き当たるのは当然であり、悩みながらその対応を通して教師としての力量を形成していくことになる。問題にすべきは、対応できる範囲を越える事態に陥ることである。したがって、そうならないための備えが重要であり、大学院時代に学べることと、学校現場に出てから行えることの両方で備える必要があるだろう。後者については、勤務する学校の組織体制や教職員文化によるところが大きいものの、職場の同僚や管理職とのコミュニケーションが鍵になることを、修了生の語りが教えてくれている。

一方で、「他の同期生が苦勞している話を聞くことは多いが、自分自身は特に苦勞していることはない」と話す修了生もいる。同様に、「二度の実習や非常勤講師の経験を通して学校の様子もわかっており、話ができる同僚もたくさんいる。学校の状況を俯瞰して見られていると思う」と答える者もいた。初任期の段階で「学校の状況を俯瞰できる」というのは、大学院での学びの確かな成果と言えるだろう。また別の一人は、「赴任した時、まっさらな気持ち、何も知らないという気持ちで入っていったので、同僚の先生方にわからないことは聞いて助けてもらってきた。生徒が伸びたと思うときに、教師をしていて一番うれしい」と明るい表情で語った。謙虚な姿勢で臨むことの大切さが伝わる話である。これから現場に出て行く現役院生にとっては、大いに参考にしたい語りである。

また、授業に関係する悩みも少なからず聞かれた。「授業準備に時間がとれないことも理由の一つである。もっといい授業をしたいと思うが、なかなか時間がとれない」状況は、どの初任者にも共通する悩みであろう。実際のところ「日々の授業の教材研究や流し方について悩むことが多い」とのことだった。頑張っているのだが、「テスト結果が他クラスに比べて顕著に低くなり、ベテランの先生との差を感じている」というケースもあった。また、小学校で担任をする一人は、「年度当初の膨大な事務作業や書類の配布回収・点検、保護者連絡をやり切るという責任、授業、打ち合わせ、会議等とすさまじいスピードで進む。実習で見てきたことなんて、その半分もない」と感じながら4・5月を過ごし、「息ができないほどだった」と1学期を振り返った。

(2) 日々の勤務の中で、大学院での学びが活かされていると感じることは？

大学院での学びが日々の勤務の中で活かされていると感じることは、おおよそ次のとおりである。

〈大学院での学びが活かされていると感じること〉 (単位：意見の数)

・ 大学院の授業・ゼミでの学び (教育観、理論等) . . . 5

・省察、振り返って考える習慣	・・・ 4
・実習等での経験（子どもとの関わりや授業経験）	・・・ 4
・グループワーク、話し合いの経験	・・・ 2
・フィールドワークでの学び	・・・ 1
・生かされていることがすぐには思いつかない	・・・ 7

最も多かったのは、「生かされていることがすぐには思いつかない」という回答である。「始まったらそれどころではない。実際と大学院での学びとの違いが大きすぎる」と感じる修了生は少なくない。「何かに使ってはいるんだろうけど、実感はない。ベースにはなっているはず」というのは繕わない実感であろう。

その一方で、「大学では、理論的な学習が多かった。したがって、言葉については知識としてよく知っているし、現場でもその言葉がここにあたるということはよく理解できた」と話す修了生もいる。また、「目の前の子どもの実態から考えたいところ」などと教育観に関わることを挙げる者や、「現代的教育課題のノートを時間のあるときに読み返し、リフレッシュしている」という者もいて、大学院での学びが修了生の支えになっている一面を確認することができた。複数の修了生が、「今、実習での生徒対応の経験が生きていると感じている。日々いろいろなことがあるが、一日を振り返って省察することで、ある程度整理することができている」と語っている。やはり大学院での「省察」の経験が生かされていることは確かであろう。さらに、「学部の時と違って大学院の実習では、いろいろな事例を扱うことがあり、思考を柔軟くして柔軟に対応することができるようになった」と振り返る者や、「同僚と省察する場を持って、目の前の課題について対処できればと思っている。学部卒で教員になっていたら、今のような意識や振る舞いは出来なかったと思う」と、大学院での学びを積極的に意味づけて語る者がいた。こうした修了生の言葉からは、教職大学院で学ぶ意義を改めて確かめられただけでなく、「同僚と省察する場」を意図的に作りながら学校課題に向き合おうとする反省的実践家の気配を感じ取ることができる。

（3）教職大学院でもっと学んでおけば・・・、研究しておけば・・・良かったと感じていることは？

教職大学院でもっと学んでおけば良かったと感じていることは、おおよそ次のとおりである。

〈教職大学院でもっと学んでおけば良かったと感じていること〉（単位：意見の数）

・生徒指導、教育相談等	・・・ 8
・授業・授業力に関わること	・・・ 4
・評価について（評価の実際）	・・・ 2
・1日担任の経験	・・・ 2
・事務処理・雑用経験	・・・ 2
・研究会・研究発表会への参加	・・・ 1
・フィールドワーク	・・・ 1
・校務分掌	・・・ 1
・保護者対応	・・・ 1

最も多かったのは、「生徒指導、教育相談等」に関するものだった。「生徒との対応の仕方や

接し方について、学ぶ機会がもう少しあればよい」「日常の小さな事例を生徒指導で学びたかった。大きな事件になった事例ではなくて、学校生活の中での普通にある事象への対応や、そうならないための目配り気配り、事前の持っていく方などを学んでおきたかった」などである。他にも、「子どもが出している信号や視線について、何を意味しているのか、そこからどのように引っ張っていけばよいかということに戸惑っている」「今一番苦勞している生徒指導上の問題について、児童対応や保護者対応についても実習ではなかなか実践できていなかったのも、そういった実践ができればよい」など、いずれも日々直面する生徒指導の具体にもっと触れたかった、学びたかったということであろう。さらに、「教育心理や教育相談についてなど、対生徒についての教育理論が学べる機会があるとよい。特にM2では7週間の実習があったが、理論の学びがもう少し多い方がよかったのではと考えている」のように、カリキュラムの改善に関わる意見も収集できた。

また、「もっとたくさんの授業を見たり、いろいろな教室を参観したりできれば学級経営にも生かせる」との声も少なくなかった。授業力や学級経営の力を付けるために、優れた授業実践や学級経営の様子を参観する機会を増やすことは有効だと考えられる。加えて、「実習に行き非常勤講師もしたが、担任は責任の重さがまるで違う」として、「一日担任」経験の必要性を訴える声を修了生からも聞くことができた。

5. 訪問者シートから

(1) 管理職ヒヤリングで感じられたこと

今年度も管理職からの評価は概ね良好であった。「もちろん経験不足はあるだろうが、生徒への対応の様子や同僚との関係の作り方など高く評価されていた」「管理職からの評価も高く、大変前向きで学校業務ができている。何よりも学級経営ができていることに対する評価が高い」「積極的に取り組んでいる姿勢がとてもよい。今後も若手の柱として活躍することを期待されている」など、総合的な側面で評価されていることがわかる。同様に、常勤講師として勤務する修了生についても、「昨年度から非常勤講師として勤務しており、即戦力として活躍している」と報告にあるように、これまでの経験を生かして実践している様子が垣間見られた。

その一方で、管理職からの率直な声として、「現場力というか、子どもをどれだけ見られるかという部分が求められている」という意見が聞かれた。さらに、「現場は授業力や生徒指導力を求めているが、高いものではなく一定水準のものでいい。それより教師としての軸、教師として生きていけると安心して見ていられるという部分を育てることが重要だ」という指摘がされている。

好評価の一人について、ある管理職は次のように話した。「様々な特性のある子たち、そして保護者に向き合っていく芯の強さ、教員としてどうしていきたいのか、そういった軸をもってくれていたことが一番大きかった」と。ここで語られた「教師としての軸」が意味するところは一考に値する。京都連合教職大学院がスローガンとして掲げる「人間教師」や「大学院知」という概念と関連付けて考えることもできるだろう。管理職から「何よりもいいのは教職員と

の信頼関係を築いているところで、協働して積極的に仕事を行うことができ、今後の伸びが楽しみな教師である」と認められる修了生がいる一方で、「学習指導など一定の力量を有しており期待されているものの、(現場で)思うようには育っていないのでは」と訪問者が心配するケースが報告されている。後者の修了生は学業成績が良好だっただけに、このような違いがどこから生じるのか。そこに教師育成の勘所があるのではないだろうか。

(2) 修了生ヒヤリングで感じられたこと

今回のヒヤリングでは、校種によってやや異なる傾向が確認された。

小学校で勤務する修了生は、全員が担任を持っていることから、担任の責任と業務量の多さを痛感しているようだった。「一人で担任の責任を背負って黒板の前に立ち、子どもたちと向き合い続けることの怖さみたいなものを感じ始めている」という。訪問者からの、「大学院で学んだことと担任業の実際とのギャップの凄まじさで心がやられたんだと感じた。実際は、担任として実習で関わった子どもの何倍も困難な子どもたちを一手に引き受けることになる。この変化についていけないのだろう」という報告が特徴的である。その一方で、「授業のことや生徒指導のこと、いろいろと自分なりに悩んでいるが、学級経営もしっかりとできており、授業が成立していて落ち着いた展開ができています」姿や、「毎日の授業をこなすことに精一杯であるが、とにかく授業が成立していること、保護者対応に困っていないことからしても、上手く教員生活を送れている」というように、初任者教員として踏ん張りながら現場に立つ姿も報告された。

中学・高校では、順調に勤務している様子が比較的多く報告されている。「さまざまな課題を持った生徒たちとの授業づくりに最初は苦労したが、今では随分慣れ、授業を楽しんでいる様子だった」であるとか、「生徒とは、休憩時間や掃除の時間、部活動の時間に話をしようとする姿勢がある。先生方にもわからないことは聞き、よき同僚性を築けている。情報処理を担当し、学校では大切な存在となっている」などである。それでも、「学校の状況が理解できていることで自信過剰になり、周囲との関係が悪くならないか、相談なしに事を進めることはないかという点が危惧され」たり、「同世代の教職員は多いが、腹を割って話せるという関係にはなさそうなので、当該の教頭先生に相談するか、大学にメール等で連絡するように声掛けをした」と、修了後も一定のサポートを必要とするケースは少なくない。

(3) その他感じられたこと

今回のフォローアップの対象が、旧カリキュラムで学んだ最後の修了生ということもあって、訪問した教員からは次のような感想が聞かれた。「従来(旧)の集中実習のみの実践では、実際の現場ではなかなか役立てることが難しいという一面が見られた」であるとか、「学部卒よりも現場経験は多く順応は早いと思うが、実際現場で求められることをもっと多く大学院の中で身に付けられるように考えていかないといけない」といった意見である。次年度の終了生からは、新カリキュラムの下で年間を通して学校現場を経験していることから、「水曜実習を経験した修了生が、実際どんな教師生活を送って、どう感じるかといったことを検証してみたい」と、訪問者の誰もが思ったところである。

だが新カリキュラムで学んだ院生であっても、「大学院での学びと、日々現場で活用しなければならないスキルとはなかなか一致していない。特に人との関わりや児童生徒理解の仕方などは、頭では分かっているが、実際の場面になるとどのように対応してよいか分かっておらず、上手く活用できていない」という課題は残るであろう。「教職大学院なので研究の部分は大事だが、それを大きく捉え過ぎることには注意を要する。院生といえども『子どもを扱う能力や感覚』『保護者と対応する能力や感覚』など学校で働く人としての力やセンス・感覚が既に十分備わっているか」というとそうでもない。その部分にスポットを当て、実習を通して十分な力が付くように、授業以外のところでもきちんと経験し学べるように内容を整理し、院生にもその心づもりをさせる必要を感じる」との意見はもつともである。また、「集団を扱えるようになってから授業という現実がある。それを授業が楽しければ子どもはついてくるという言葉が担任を追い込む。当たり前のように言うてはいけない」ことにも留意したい。

おしなべてどの修了生も各々の職場で懸命に頑張っていた。「2年間の大学院での学びを通して、自信を持ち、教員生活では上手くいかないこともあるが、よい授業を行い生徒とよいコミュニケーションをとることに努めており、教師としてよいスタートをきったと考える」という報告は、多くの修了生に当てはまるものだ。「院生時の実習でも生徒と関わって信頼関係を上手につくった経験があり、初任者としても変わらずその力が発揮されているようだ。やはり実習等でいろいろな経験をする中で、児童生徒理解も含めて自分がある程度確立していることが大事だと感じた」との感想は、先述の「教師としての軸」の形成と重なるところが大きい。

6. まとめ

今回のフォローアップを通して、責任の重さや業務量の多さであったり、実際の児童生徒対応の難しさであったり悩みながらも、そこに踏み留まって頑張る修了生の姿を垣間見ることができた。管理職の聞き取りからは、至らないところは当然あるとして、総じて良好な評価がされていることが確認できた。その中で明らかになった課題や意見を簡単に振り返っておきたい。

まず、初年度からいきなり担任を持つことの負荷の大きさである。「大学院で学んだことと担任業務の実際とのギャップの凄まじさ」に如何にして備え、それを如何に乗り越えるかということである。その課題は、1年目から担任を務めることが多い小学校で特に深刻である。制度的に解消する一手として中央教育審議会の特別部会では、新卒1年目の教員は学級担任ではなく教科担任として学級副担任を担当させる等のことが提案されている²。大学院としても何ができるかを検討する必要がある、「一日担任」を経験するプログラムはその手始めになるだろう。

次に、教職大学院でもっと学んでおけばよかったこととしては、「生徒指導、教育相談等」が多く挙げられた。その声に応える必要があるだろう。問われているのは、学校現場で日々直面することになる生徒指導場面に対応できる力をどうやって培うかということである。その力（生徒指導力）は、改訂生徒指導提要にある発達支持的な生徒指導の観点も含めて広く捉えるべきであろう。まずは児童生徒理解を深め、「水曜実習」を含む豊富な現場経験や児童生徒との関わりを

通してそうした力を培う過程に、われわれ教員も伴走したいと考えている。その力が、授業や学級集団づくりの基盤になることは言うまでもない。加えて、授業力や学級経営の力をさらに伸ばすためには、優れた授業実践や学級経営の実際を参観する機会を増やすことも必要であろう。

また同時に、「教師としての軸」の形成についても、心にとめて指導に当たりたいところである。再掲すると「様々な特性のある子たち、そして保護者に向き合っていく芯の強さ、教員としてどうしていききたいのか、そういった軸」である。いわゆる「即戦力」と重なる部分もあるが、その対局に位置する意味を包含している。教師としてのその後のキャリア形成の核になるようなものと捉えるならば、それこそが教職大学院で培うべき力ではないだろうか。

先述のとおり、当該学年が旧カリキュラムで学修した最後の修了生となる。次年度（令和5年度修了生）からは新カリキュラムの下で年間を通して行う水曜実習と省察を経験していることから、フォローアップで明らかになった課題の幾分かは解消されることを期待している。しかし、単純に現場経験の量という点では、これまでから相当な割合の院生が非常勤講師や学校ボランティアを経験したうえで現場に出ていることから、カリキュラム変更の前後でどれほどの違いが見られるかは未知数である。今後も丁寧に検証していきたい。

フォローアップでは、現場で奮闘する修了生と顔を合わせて話し、細やかだが励ましの言葉を掛けることができた。多忙な日々を送る修了生にとって、一度立ち止まって振り返る機会になったことを願いたい。初任者の多くは5・6月の頃に最も厳しい時期を迎えているようだ。これまでは秋に訪問していたが、今後は5月頃から状況を把握し、必要に応じてフォローアップを行いうことを検討している。

今回の訪問にあたっては、多忙な中でご協力をいただいた勤務校の管理職の方々に感謝を申し上げたい。本フォローアップは、教師教育に携わるわれわれにとっても毎回貴重な気づきと学びを得るものになっている。現場で奮闘する修了生を励まし、教師教育の成果を検証する取組として、改善を重ねながら今後も継続して実施したいと考えている。

注

¹ 「省察実践演習」の授業の中で、実習校によって京都府・京都市及び小・中・高の校種ごとにグループ分けしたメンバーで前日の水曜実習を振り返るグループ省察を行っている。

² 中央教育審議会質の高い教師の確保特別部会第13回資料「『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について」

参考文献

- ・ 林 明宏（2022）「フォローアップ これからの教職大学院にもとめられるもの」『京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報第11号』
- ・ 佐古 清（2023）「フォローアップ 令和4年度（令和3年度修了生）フォローアップの結果から」『京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報第12号』
- ・ 京都教育大学（2011）「京都連合教職大学院 専門職基準」
- ・ 文部科学省（2023）『生徒指導提要（改訂版）』
- ・ 文部科学省（2024）中央教育審議会質の高い教師の確保特別部会第13回資料